新春座談会

難局をどう乗り越えたか

―私のチャレンジ

出席者
辻元清美（民主党・衆院議員）
西舘好子（NPO法人日本子守唄協会理事長）
村木厚子（内閣府政策統括官（共生社会担当））
進行＝久保公子（本誌編集部）

――人生山あり谷あり。今日は思いがけない人生を果敢に歩んで来られた辻元清美さん、西舘好子さん、村木厚子さんを迎え、2012年幕開けの座談会をお願いしました。それぞれこれまでの人生を駆け足で振り返ってくださいませんか。

辻元　私は、奈良県の吉野の桜の名所の近くで生まれ、小学校は大阪、奈良で転校を繰り返し、中学校は奈良、高校は名古屋、20歳で東京の大学に進学しました。父の商売の失敗で不安定な子ども時代を過ごしましたので、いつかは社会の「レール」に乗って走りたい（笑）というのが私の目標でした。母も商売で苦労していたので、私にはサラリーマンの男性をゲットして安定して生きなきゃ駄目よと言いつつ、やはり男は当てにならないので、いざという時には自立して働けるようにしなさいと言われて育ちました。

上京後、23歳で国際交流団体のピースボートを立ち上げました。当時のスローガン・闘争型の市民運動には馴染めず、今で言えばNPOですが、誰でも参加しやすい、経済を作り出していく提案型の活動が日本でも必要だと思ったからです。

その活動中の1996年10月1日、当時社民党党首の土井たか子さんに衆院選（比例代表近畿ブロック）に立候補してほしいと要請されました。社民党が民主党と小さな社民党に割れ、小選挙区が初めて導入された選挙です。突然の話で、最初はお断りしましたが、とにかく助けてほしい、明日までに返事をとせっつかれ、土井さんのような立派な女性にお願いされて断ったら失礼だと母に言われ、翌2日に承諾しました。10月8日から選挙が始まり、20日に当選。そこから人生が大きく変わりました。

選挙後、自社さ政権となって最初から連立与党に入り、加藤紘一さんや野中広務さんほか、自民党の大物議員の方たちにも育てていただきました。その後社民党が政権を離れてからは、国会で小泉首相の集団的自衛権に関する見解を質して「総理、総理！」を連発し、鈴木宗男衆院議員との対決などいろいろしている中、02年3月、秘書給与流用事件で議員辞職。翌03年7月逮捕、04年2月には執行猶予付き有罪判決が確定しました。

この5カ月後の参院選に大阪選挙区から出馬しました。この時は多くの人に反対されましたが、政治家は時々「非常識な決断」をしないと前に進めないことがあります。私は小泉さんがまだ総理の時にもう1回勝負したかった。結果は71万8125票、次点で落選でした。それから05年の衆院選（社民党・比例近畿ブロック）で復帰し、09年（同・大阪10区）も当選。09年選挙で政権交代し、社民党も民主党・国民新党との連立政権に参加。私は国土交通副大臣に就任しました。

しかし8カ月後、普天間問題で社民党が政権を離脱することとなりました。せっかく政権交代し、その意味をもっと追及したかった私は悩みに悩みましたが、離党し、半年ほど無所属で活動していました。そこに3月11日、東日本大震災が起きました。震災の2日後に総理大臣補佐官に任命されてボランティアや被災者支援の担当となり、菅総理辞任まで官邸に入ることになりました。

今は1ミリでも2ミリでも前に進めて政治を変えたいという思いが強くなり、民主党に入って今日に至っています。51年間の人生を疾走してきました。

メディアの責任

西舘　何十年の歴史を一言で話すのは難しいことですが、人生の節目節目で私はほとんど経験していないことはないですね。ただ一生懸命生きて、結婚して、離婚して、仕事をし、なおかつお二人と同じように突然訴訟され、裁判も経験しました。荒波の中で倒産もしたし、理不尽なことがいっぱい自分に降りかかり、その都度自分で解決するしかないと思って今になったんです。辻元さんはレールに乗りたいと言われましたが、皆がレールに乗って外の景色を見ている時に、私は裸馬でその横を一生懸命走り、永久にレールには乗れないだろうと思っています。

私たちは3人とも恐らく思わぬことの渦の中で翻弄されて、歩こうと思ってはいなかった道を、気がついたら歩かされていたということではないでしょうか。多分男の人にとっては非常に羨ましいけれども、癪に障る存在であり、今日はその3人をよく集められたなと思います。

――浅草生まれの江戸っ子、西舘さんは61年に作家井上ひさしさんと結婚、その名プロデューサー役から劇団こまつ座主宰になられ、86年に離婚、翌年に再婚されたあたりの経緯はご著書にも詳しく書かれていますが、今話された裁判というのはどういうことですか。

西舘　その前に、私も辻元さんと同じで選挙に出たことがあります。95年の参院選の公示1週間前、さきがけ代表の武村正義さんに千葉選挙区から立候補を勧められたのです。結果は落選でしたが、私のことですから1週間で舌禍事件でも起こして辞職していたはずなので（笑）、落選してよかったと思っています。

裁判というのは、今から8年くらい前のことです。私が書いたドメスティック・バイオレンスの本に対して、これは自分が書き、自分が西舘の名前で出したという別の自称作者が出現して訴えられました。滅茶苦茶な話で、絶対あり得ない。それで、なぜ調べもしないでこういうことが起きるのかと取り調べの時に聞きましたら、書類が揃っていればいいんだと言われました。怒り心頭に達して2年間、私は出版社と一緒に裁判で頑張り、無罪を勝ち取りましたが、この時期はもう死にそうで、地獄でした。

――『男たちよ妻を殴って幸せですか？――ドメスティック・バイオレンスの周辺』（早稲田大学出版・02年）が、裁判になった本のタイトルですか。

西舘　いいえ、それは発売1週間前に訴えられたので、本屋さんには出ていません。『男たちよ』は7カ国で取材をしてまとめたもので、冒頭、日本のDV法がいかに不備であるかも書きました。

村木　私はそういう意味では実に平凡なレールに乗ってきました。高知で生まれ、父がわりと教育熱心だったので中高一貫の私立の学校に行かせてもらい、とても幸せな人生のスタートを切りました。ちょうどその頃、いろいろな事情で父が脱サラして社会保険労務士で開業することとなり、私立はお金がかかるので、経済的にかなり辛い時期がありました。中学3年生くらいから夏休みも冬休みも春休みも、休みが始まった日から終わる日までアルバイトをし、そのお金で次の学期はお茶も飲みに行くし、本も参考書も買うという生活でした。ですから卒業後は自分でちゃんと食べられるようにしようと思っていました。幸い、家から通える大学なら行かせてあげると親に言われて高知大学に進み、就職しようと思ったら県内に4大卒女性を採る民間企業がひとつもないことに気づきました。よほどのんびりしてたんですね（笑）。それでもう公務員しかないと思って試験を受けたら、当時から女性を採用していた労働省に採用されました。

そして、真面目に働いて自立して生きていくことだけを目標として30年間、絵に描いたようにそのレールの上をしっかり歩いていたのに、ある日突然、郵便不正事件に絡む虚偽有印公文書作成事件が起こりました（本誌10年合併号参照）。

辻元　村木さんの名前が突然出た時

西舘好子氏

にしだて・よしこ　1940年東京都生まれ。61年作家の井上ひさし氏と結婚。82年劇団こまつ座を立ち上げ、プロデュースを手掛ける。85年第20回紀伊國屋演劇賞団体賞受賞。その後離婚。89年劇団みなと座創立・主宰。2000年「日本子守唄協会」（02年NPO法人となる）代表に就任。

はさぞ驚かれたでしょう。

村木　それはもうびっくりしました。最初は、多分その団体が勝手に作った偽証明書だろうと思っていたら、当時の厚生労働省の障害保健福祉部企画課社会参加推進室の係長が逮捕されました。やがて、この係長が、当時課長だった私の命令でやったと供述しているとか、当時の上司が私に指示したと供述しているとか、そういうことがどんどん報道されて、マスコミに追いかけ回されるようになってしまいました。

西舘　勾留されたんですよね。

村木　初めて大阪地検に呼ばれてその日のうちに逮捕され、そのまま勾留されました。勾留後は家族、友人を頼り、弁護士さんを頼って検察とやりあう材料集めをお願いするしかありません。自分では何もできないというのが本当に不思議でした。

西舘　でも村木さんはそんなことをする人ではないと、女性たちが声を上げました。キャリア官僚の突然逮捕というのは大変な事件ですよね。

村木　よほど自信があっての逮捕だったんだろうと思います。当初は政治家をターゲットにし、それが駄目ならせめて現職の官僚をという思いがあったのではないかと言われています。西舘さんが言われたように、まさに調書とか書類さえ揃えば有罪にできる。検察のストーリーに沿った調書さえ作ってしまえば、それこそが真実だという発想に陥り、本当は何が起こり、真実は何かということは忘れてしまうようですね。

辻元　私の秘書給与事件の場合は国会で騒ぎになり、02年3月に辞職しました。ところがそれから1年以上もたって逮捕されたのです。辞職直後、私は関係の書類を全部提出し、罪になるのだったらそれはそれで認めるので早く調べてほしいと弁護士さんを通じて検察に伝えてもらいました。それなのに、それからだいぶしてから検察に秘書が呼び出され、また元総理大臣・社民党党首の村山さんはじめ全国の私の知り合いの家にまで警視庁が行ったそうです。なぜそんな捕り物帳みたいなことをやるのか、不可解でした。

　また、村木さんの場合もそうでしょうが、政治家を捕れないんだったら、それ相応の事件に着手してしまった以上は……。

村木　何か成果を上げる必要がある。

辻元　そうです。当時、自民党の鈴木宗男さんも逮捕されるなら、与野党相打ちだから、野党からも一人ということになるのではないかと言う人までいました。

西舘　面子（めんつ）で事を進めるのだったらおかしい話です。

辻元　それと、メディアは増幅させるというか、裏も取らずに事実ではないことを平気で報道し、それは検察や警視庁などからのリークなので、打ち消そうにも打ち消しようがありません。

西舘　この頃しみじみ諸悪の根源はメディアにあると思います。世論が期待しているからだとメディアはよく言いますが、私も離婚の時に豆腐も切れない女だとまで言われ、これは人を抹殺するつもりで掛かってきたと思いましたね。メディアと闘おうと反撃に出たら、とことんやられてしまう。それで、言わない、見ない、聞かないを決めて、何とか生き延びました。ある意味ではお二人が勾留されたのはよかったのではないでしょうか。

辻元　私も逮捕された時はちょっとホッとしました。手錠を掛けられ、腰紐をされ、車で留置所に行きましたが、建物の中に入ったらマスコミは来ませんからね。それくらい恐怖でした。

村木　同感です。拘置所に入った最初の夜、取り調べが終わって2畳のものすごく静かな自分の部屋に帰り、ここまでマスコミの人は追って来ないだろうと思ったら、爆睡しました。

辻元　それはすごい。私は8人部屋の雑居房で、最初の3日間は眠れませんでした。ここから出られないのではないかとか、私に投票してくれた支持者がどう思っているかとか、非常にプレッシャーがありました。

　元気を取り戻せたのは、地元の高槻市の陸橋の上でリレートークが始まったことを弁護士さんに聞いてからです。辻元だけを逮捕するのはおかしいと市民が200人くらい集まってきたそうです。それがニュースでも流れたらしく、その翌日の取り調べで、「解散させるように声明書を出せ」と言われました。そんなことを言われても誰が来ているのかわからないし、自由にやってくれていることなので、もちろん断りました。

子どものために

村木　家族は無条件で私のことを信じてくれると思っていましたが、勾留2日目に弁護士さんから「あなたを信じているから真実を貫きなさい」というメッセージの下にいっぱい知人の名前が書かれた紙を、面会室を仕切るアクリル板越しに見せられました。次の日もその次の日も名前が増えていき、本当に私を直接知っている人は皆信じてくれているんだとわかったら、それは非常に大きな支えになりましたね。

　それから、娘が将来思い出して弱気になるような対応は見せたくなかった。子どものためにと思った瞬間、私は絶対大丈夫だ、もう負けることはないと確信が持てました。

西舘　本当よね。私にも45、47、49歳の娘がいますが、私の世代は親とつながっていくもののためにしか頑張ろうとは思わなかったですね。子どもの頃、働きづめの親を楽にさせてあげたいと思って働いたし、娘のために、娘の世界を狭くするような生き方はしたくないと、それ以外のことは考えませんでした。皆さんそうではないでしょうか。そこが女の人の強さでしょうね。辻元さんは娘と同世代、私はお母様の世代だからよくわかります。

辻元　逮捕されたことを母がニュースの緊急速報で見て泣いていると思ったら、辛かったですね。でも母は弁護士さんを通じて毎日手紙をくれました。へこたれるな、と。子どもがいない私の場合は、「辻元清美」と書いてくれた有権者に申し訳なく思いました。

村木　私も、私を信じてくれた役所の仕事仲間や外の友だち、その人たちに恥をかかせたくない、だから絶対無罪を勝ち取りたいという気持ちは強かったです。

――村木さんの場合、障害者のグループの方たちがいろいろ応援されたそうですね。

村木　01年に旧労働省と旧厚生省が統合されて厚生労働省となり、私は全く不慣れな旧厚生省の福祉分野の仕事に飛び込みました。当時はちょうど障害者自立支援法をつくっている頃で、関係の人たちといろいろな議論を積み重ねていて、その時に知り合った人たちが、今回様々な形で応援してくださいました。知的障害の人たちが支援する会に500円ずつ裁判費用をカンパしてくれていて、本当に嬉しかったですね。

辻元　大体官僚とか政治家は抗議の対象で、要請文や抗議文が来ることが多いのですが、それは村木さんが誠実に対応された結果だと思います。私も全国から裁判費用のカンパが1219万7418円集まったり、会ったこともない人の音頭で辻元の逮捕は不公平だという新聞の意見広告がある日突然出たり、嬉しかったですよ。それで生き返らせてもらったので、もう私の体は私だけのものではない、一生皆のために働かなければと心を決めました。

――10年9月に村木さんの無罪判決が確定し、この事件を契機に検察のあり方が問い直されています。

西舘　あれで本当に検察は変わったのでしょうか。とてもそのようには思えませんが。

村木　いろいろな検討は始まりましたが、まだ途上ですね。ただ個別に最高検察庁や法務省の方たちと話をすると、いろいろなひずみや問題があり、このままではいけないと思っている人は多いという印象です。何とかしたいという思いは組織の内部にもある気がします。でも世の中の関心がふっと冷めると、また逆戻りになってしまうのではないか、それが心配です。

西舘　本当に熱しやすく冷めやすい国民で、きちんと見届けるという癖がないのが問題です。

村木　仕組みも変えて、ちゃんと結果が出るまで私はずっと見守っていきたいと思っています。

　実は11年6月、江田法務大臣（当時）から、取り調べの可視化を含めた刑事司法制度の見直しを議論する特別部会を法制審議会につくるのでその委員になってほしいと言われ、メンバーに加わりました。

辻元　あの人事はよかったですね。

――以前、徳島ラジオ商殺し事件の冨士茂子さんの冤罪をはらす運動を市川房枝先生たちがしていた時、冨士さんがあの小さな体で「私は司法を正すために闘っている」と言われ

村木厚子氏

むらき・あつこ　1955年高知県まれ。78年労働省入省。島根労働基準局、本省婦人局婦人政策課、厚生労働省雇用均等・児童家庭局雇用均等政策課長、社会・援護局福祉基盤課長などを経て2008年雇用均等・児童家庭局長。09年6月大臣官房付（同年7月虚偽有印公文書作成・同行使罪で起訴、10年9月無罪判決）、10年9月から内閣府政策統括官。

たことを思い出しました。司法に対する要望をもう一言ずつ、お話しください。

西舘　これまで冤罪事件は数多くあり、それによって泣いたり、家族離反したり、ちゃんと生きられなくなったという歴史が日本にあったと再認識しました。それは今回の村木さんの一件でもよくわかりました。金や地位、学歴、組織で人が全部区分けされ、人間性を軽視してきた近代国家は、もうそろそろ壊さなければいけないのではないでしょうか。その点では、村木さんの事件はご本人にとっては迷惑なことでしたが、国民にとってはよかった。権威を持つ人は権威をもう一度洗い直してほしいです。

村木　せっかくいろいろな人の関心が集まったところですし、私たちも警察や検察は信用したいですよね。もう一度信頼できる形にするにはどうしたらよいのか。人間誰しも功名心とかサボりたい気持ちとかありますので、個人のモラルに頼るのではなく、そういう間違いが起こりにくい仕組みづくりをお願いしたいし、諦めずに見守っていきたいですね。

辻元　留置所は代用監獄と言われ、その国の民主主義度は代用監獄などの扱いで測れると言われています。そういう意味で日本は、本当の民主化は進んでいません。特に司法や検察などに携わる人たちは、人権意識や民主主義とは何かを考えること。そして権力を行使する時は、権力を持てば持つほどそれを抑制的に使わなければいけないという原則を踏まえるべきと思います。

苦悩と希望は友だち

――今皆さんが取り組んでおられる仕事などについてもお話しください。

村木　私は10年9月から内閣府で共生社会政策担当の政策統括官を務めています。共生社会は基本的に誰もが排除されない、お互いに個性や人格の違いを認め合い、支え合って暮らせる社会がテーマです。今とりわけ重要な分野は子どものことだと思っています。本当に子どもが産みにくく、育てにくくなっていますから、そこの政策を社会保障の中でも大きな柱としてきちんと位置づけること。同時に、高齢者とか障害者と言われる人たちは今までは社会に支えてもらう側の人だという意識がありましたが、そうではなくてその人たちも大きな力を持っているのだからその人たちも支える側にも回るし、その代わり誰もが必要な支えは堂々と胸を張って受ける。その仕組みをつくっていくのが、私の役割だと思っています。

　また、今回私は支えられる側の立場を経験し、仲間の支えと、弁護士さんなどプロの支えの両方が非常に大事だと思いましたので、政策的によい形の支え合いの社会づくりを進めていきたいですね。

辻元　日本中の人が村木さんを知ったので、村木さんがメッセージを発してくださるとわかりやすい！

西舘　その点、何でも無駄にはならないということですよね。

村木　そうですね。ただ、72万人の人に名前を書いてもらう政治家と違い、役人はずっと黒子で、誰にも名前を知られないという中でやってきましたので、今の状況には正直ちょっと戸惑っています。

西舘　私は60歳の時、5円玉1個しかない状況の中で日本子守唄協会を立ち上げました。当時、子どもの虐待が社会問題になり、何とか子どもを救いたいと思ってカウンセリングを勉強して相談室を開いたりしていました。そんな時、取材に行った警視庁で「まだ子守唄を聞いていられる年代の子どもたちがこういう不幸な目に遭っている」と言われ、これだと思いました。それでまた猛勉強を始め、全国各地の子守唄を集めることになったわけですが、子守唄が日本の社会からなくなってから犯罪が増え、また子どもを産まなくなっています。

　子守唄というと、ただ「ねんねんころり」だと思われていますが、とんでもない。最も文学的で、いかに女がしたたかに生きてきたか。政治家でも考えられないようなことも唄に託しています。辻元さんが生まれた奈良では、吉野の桜、大峰山（おおみねさん）の利権を巡って争う子守唄がその土地に残っています。村木さんの高知でも、海の男の1本釣りの子守唄が残っています。それらを残してきたのは当たり前の女、母親たちです。政治も経済も文化がバックにないと駄目だと思います。文化というのは、頭ではなく、体、五感を使って人に接することから始まります。

　今、被災地の子どもたちを疎開させる運動をしていますが、いくら法律や制度をつくっても、そこに心をどうやって育てるかを入れない限りそれは単なる形に過ぎません。お二人にはぜひそこをわかって、女性のたくましい智恵を政治や政策に活かしていただきたいと思います。

辻元　私が今取り組んでいるのは、まさに新しい公共政策です。「居場所と出番と絆がある社会」でこそ人は生きていけます。その社会をつくる一つの起爆剤がNPOを中心とした新しい公共だと思っています。

　もう一点は自然エネルギーの促進です。戦前の最大の国策の誤りは、誰も止めずに、止められずに戦争に突入したこと。そして戦後の国策の誤りは原子力政策だったと思います。先日の政府の政策仕分けで、今まで原子力政策を進めてきた人たちに、なぜ除染、廃炉や事故発生時の対応が研究されてこなかったのかという質問が飛びました。そんな研究をしたら、事故が起きるとか危ないと思われるから研究しなかったという回答でした。今回の福島第一原発の事故は、そういう政治や意思決定のあり方が引き起こしたのではないでしょうか。国家の過ちです。自然エネルギーの促進は、国の形を変えることにもつながります。

西舘　今は皆原発に反対していますが、いずれまたグローバル化だとか世界に名だたる国家になりたいといって、原発賛成に動くのではないですか。こんな地震国に原発を54基もつくった責任は政府にあります。今度大きい地震が起きたら危険どころかもう終わりですよ。ではどうするのか。反対するだけで、国民にはその解決策は全く示されないので、次の政治家はそれをやるべきです。

辻元　政治は与党と野党があって、常に権力をチェックし、そして反対をはっきり言う政党が必要です。私は今まで散々「総理、総理！」などと権力を追及してきました。この役割は大事です。しかし、今度は震災復興はじめ実際に政治を動かしていくことにエネルギーを使いたいと思うようになりました。

村木　震災の時のことで印象に残っていることがあります。それは、4月に蓮舫大臣が福島県郡山市の避難所ビッグパレットに行かれた際、被災者の皆さんに「大変でしたね。一緒に頑張りましょう。私たちも一生懸命やりますから」と励ましながら歩かれた後ろを付いて行きました。そうしたら皆さんが私の顔を見て、「村木さん大変だったね、よく頑張ったね、頑張りなさいよ」と応援してくださったのです。まだ4月ですから、ダンボールの仕切りで一人一畳もないような、避難所が一番満杯の時、そこにいる皆に励まされ、もう恥ずかしいやらありがたいやら。あんな大変な目に遭いながら、何と強くてやさしい人たちなんだろうと感激しました。

西舘　私も、湯川れい子さんや藤村志保さんの〝三婆トリオ〟で被災地に行きますが、私たちが話すと皆さん泣かれます。それは当たり前です。とんでもない目に遭った人たちは、人生の重みの中で生きた人しか信用できないでしょう。

辻元　私も全く同じで、政治家としていろいろ厳しい言葉を受けることを覚悟して被災地に入ったら、「辻元さんも大変だったね」と逆にねぎらわれ、一挙にこちらの気持ちも解けて本音で話すことができました。

　私は事件の渦中にマスコミに張られたりして辛かった時、「苦悩と希望は友だち」だと思い至りました。どうでもいいと投げやりになれば苦しくもないけれど、希望を追い求めるから苦しいんだと思えた時、光が見えました。

西舘　70歳まで生きると、幸せの分量と不幸の分量は同じくらいだということがわかりますよ。

辻元　私はまだまだ苦悩の方が多いような気がしますが。

西舘　今はそう思えても、人生を終える時はなぜか帳尻が合っているものです。

村木　帳尻が合う……いい言葉ですね。これから希望を持って生きていけそうです。

――人生にどう向き合うか、それぞれのお話をうかがい元気が出ました。ぜひよい年にしましょう。今日はありがとうございました。

（11・11・24　衆院第2議員会館面談室）

辻元清美氏

つじもと・きよみ　1960年奈良県生まれ、大阪育ち。衆院議員大阪10区（高槻市・島本町）／4期目。現在、衆議院国土交通委員会理事、東日本大震災復興特別委員、憲法審査会委員、民主党政策調査会副会長、「新しい公共」推進会議副議長、NPO議員連盟幹事長、「一人ひとりを包摂する社会」特命チーム座長代理、日中友好協会顧問など。